

書籍の紹介

『障がいのある子が「親亡き後」に困らないために今できること』

著者：鹿野佐代子 明石久美 出版社：PHP 研究所

テーマその他

「自分の死後、障がいのある我が子が路頭に迷わないように、今からできることは何だろう？」
これは親が必ず直面する問題です。ただ、そうは言っても具体的に何から始めたら良いのか見当がつかない、という人が多いのではないのでしょうか。

この本は、「親亡き後」に向けての準備や対策として抑えておくべき事柄を、福祉と相続の両面から取り上げています。

相続のページでは、判断能力に不安がある子どもを持つ親が元気なうちにやっておくと望ましいことが、具体例を用いて解説されています。認知症対策、遺言書作成、葬儀、成年後見制度、家族信託などについてはじめて耳にする人は、やや難しく感じるかもしれません。しかし、相続に関して最低限知っておくと困らないこと、役に立つことが項目ごとにまとめてあります。本のサイズがコンパクトで薄いので場所を取らず、必要な時にいつでも読み返すことができます。

不安だけれど、とりあえずお金さえ残しておけば何とかなるだろう、と多額の現金を子ども名義の口座に預けたり、保険に加入したりする親は少なくありません。発達障がいのある子を育てている私もそうでした。しかし、福祉専門家の鹿野氏はこう断言します。「子どもに残すべきお金はズバリ0円です！」と。つまり、一円も残さずとも子どもの行く末に心配はないのです。

なぜならば、障がいのある人は「障がい者総合支援法」という法律で守られており、生活支援のための制度やサポートが整っています。仮に親が子どもにお金を残せなかったとしても、そういった福祉制度とつながっておけば、生涯に渡って支援が受けられます。たとえ子どもが困難に陥っても、つながりがあれば救助されるのです。「お金よりも大切なのは、子どもが社会とつながっておくこと」という言葉は、親に希望を与え、勇気づけてくれます。過度に不安に駆られるのではなく、私たち親がまず取り組むべきことは、子どもに多くの経験をさせて「今」を楽しんでもらうこと。そして、そのためにお金を使うことなのです。

障がいがあるからといって自立できないことはありません。精神面、生活面、性的、経済的な自立への取り組みを親が促してあげることで、子どもは豊かな人生を送ることができるのだと説いています。これこそが、親子にとって本当の幸せであり、望むことなのではないのでしょうか。

そして、もし福祉や相続の専門家とつながる場合には、単にお金の対策を講じるのではなく、子どもの状態や困りごとを真に理解し、的確なアドバイスをしてくれる方を選ぶと、より安心であると述べています。

一冊あると助かる、実用的な本です



※無断転載禁止